

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第99号 2023年（令和5年）5月28日発行

お知らせ

会報でもお知らせしましたとおり、前号（第98号）から電子媒体のみでの刊行となりました。必要におうじて印刷してごらんください。次回の例会案内は、10頁または支部webサイトをごらんください。

第99号 目次

1、研究エッセイ（竹内直）	1 頁
2、定例研究会の記録	
第294回定例研究会	4 頁
第295回定例研究会	7 頁
3、定例研究会案内（第296回）	9 頁
お知らせ	10 頁

1、研究エッセイ

柴田南雄のシアター・ピースを再考してみて

竹内直（京都市立芸術大学）

去る3月の支部定例研究会は、筆者がプロジェクト・リーダーを務める京都市立芸術大学芸術資源研究センターの「音と身体の記譜研究」プロジェクトとの共催で「柴田南雄のシアター・ピース考」を開催した。企画は柴田のシアター・ピース研究で博士号を取得した広島大学大学院の徳永崇氏（非会員）を招いての講演と座談会を中心に構成した。講演の概要は本号所収の徳永氏の講演要旨と上野正章氏の傍聴記をそれぞれ参照されたい。

徳永氏の講演に先立ち、筆者から柴田南雄の創作史とシアター・ピースについて概説したのだが、その準備をしている過程で考えたことを——座談会で話した内容に補足を交えて——ここに備忘録的に記しておきたい。

音楽学者、音楽評論家としても活躍した作曲家の柴田南雄（1916-1996）は、シアター・ピースと呼ばれる作品群を残したことで知られるが、創作時期によって、シアター・ピースの題材には随分と違いがある。柴田は1973年の《追分節考》から1995年の《無限曠野》まで、生涯に21作のシアター・ピースを残した。これらのシアター・ピースは、柴田自身の分類によれば、（1）民俗芸能にもとづく作品が4曲、（2）社寺芸能にもとづく作品が2曲、（3）大学生のための合唱演習が4曲、（4）大阪城築城400年を記念したイベントのための作品が1曲、（5）新しいシアター・ピースが5曲、（6）佐藤信の台本による作品群が3曲、（7）西洋の中世の巡礼が1曲であり、最後の《無限曠野》は作曲者の死去のため分類がなされなかった。

この分類のなかで、（1）の民俗芸能にもとづく作品と（2）の社寺芸能にもとづく作品は、1973年から79年までの作品で、共通点としては日本の芸能に題材を求めているということがあげられる。これらは初期のシアター・ピースと違って差し支えなかろう。（4）の大阪城築城400年を記念したイベントのための作品は機会音楽の要素が強いので、少し例外的ではあるが、（3）から（7）の作品は、若干の1970年代の曲を除いて、おおむね1980年代以降の作品であり、題材も日本の芸能に限定されず、テーマにしたがって東西の様々な時代に求めている。

柴田のシアター・ピースは初期の作品、つまり（1）民俗芸能にもとづく作品と（2）社寺芸能にもとづく作品では、素材の多くを民俗芸能そのものに求め、柴田によって「作曲」された部分は抑制され、「作曲者」の役割はあくまでも素材を「構成」することにあるという傾向が強い。だが、後年のシアター・ピースになればなるほど、柴田自身の作曲部分の比重が大きくなっていく。柴田のシアター・ピースの特徴は「無名性」にあるとされるが⁽¹⁾、それは、民謡などを素材とするために、作曲者の内面が全面に出ないという意味である。そして、そうした「無名性」という特徴がはっきりと出ているのはやはり初期の作品であり、それが柴田のシアター・ピースのある種のイメージを形作っていると言ってもよいだろう。

この「無名性」とも関わってくるように思えるが、柴田の初期のいくつかのシアター・ピースは民俗芸能の継承という意図が少なからずあったことは指摘しておくべきだろう。シアター・ピースとして2作目となる《萬歳流し》（1976）は秋田県横手市の横手萬歳に題材を求めた作品だが、柴田はこの作品で伝えたいこととして「滅亡に瀕している芸能と、芸能を支えてきた人々の存在を別の形にせよ、伝承していくことの可能性」をあげている⁽²⁾。また、音楽学者の笠原潔の記述によれば、柴田は東大寺のお水取りに取材したシアター・ピース《修二會讚》（1978）を書いた意図を尋ねられ、「1000年後の人は、20世紀にどんなお水取りをやっていたか、

分からなくなってしまうからね」と答えたという⁽³⁾。

初期のシアター・ピースが内包する民俗芸能を継承するという意図は、柴田が民俗芸能にもとづくシアター・ピースを上演する際に、楽譜ではなく、芸能そのものをもとに練習することを求めていたこととも繋がる。柴田は合唱団がシアター・ピースの練習するときには楽譜はあくまでも補助手段として扱い、「芸能そのものの録音・録画に拠る素材の習得、暗記を原則」とし、その到達点として、「各人各様の音楽、演技、祈り、になり切るのが目的」だとしている⁽⁴⁾。シアター・ピースを通して民俗芸能の継承を少なからず意図していた柴田が合唱団員に芸能を身体化させることを求めたのは、芸能の伝承される場を念頭においた上での、柴田なりの新しい「口頭伝承」の形であったと考えることもできよう。

こうした柴田の民俗芸能に対する思考は、後年のシアター・ピースではほとんど顕在化することがなくなる。明示されていたのは第7作目となった《布瑠部由良由良》(1979)あたりまでと言ってよく、1980年代以降のシアター・ピースの多くは違う思考で書かれるようになったとっていいのではなかろうか。そうした変化の理由なり、背景なりを柴田ははっきりと示してはおらず、不明ではある。とはいえ、初期の作品のなかでもとりわけ「無名性」の強い《萬歳流し》や《修二會讚》と後年のシアター・ピースを比較すると、初期のシアター・ピースと後年のそれとでは、単に題材が異なるだけでなく、そもそもシアター・ピースの目的そのものが変質してしまい、それゆえに作品を作曲・構成する手法そのものにも変化が生じたのではないかという考えを強く抱くのも事実である。

ある時期までの柴田が作品を通して芸能の継承のようなことを考えていたことについて正面切って論じたものは、管見の限りほぼないが、とりわけ1970年代のシアター・ピースにおいて柴田が、芸能に直接携わっていない合唱団員に芸能を身体化させることをはっきりと求めたり、民俗芸能の継承という意図を示したりしていたことは大変興味深い。こうした思考はたしかに一面的にはユートピア的なものである。だが、芸能の継承を自らの問題として引き受けていた時期があったこと、そしてその後の思考の変質も含めて、柴田のシアター・ピースは日本の芸能に対する日本の作曲家の向き合い方を考察する様々な示唆を与えてくれるように思う。

(1) 佐野光司 「柴田南雄の軌跡——啓蒙家・教育者とポスト・モダンの前衛」『音楽芸術』54 (4) (1996) : 25

(2) 柴田南雄 『日本の音を聴く(文庫オリジナル版)』, 204, 東京: 岩波書店、2010 [1983]

(3) 笠原潔 「再刊版のあとがき」『音楽史と音楽論』柴田南雄, 258, 東京: 岩波書店、2014[1988]

(4) 柴田南雄 『日本の音を聴く(文庫オリジナル版)』, 178, 東京: 岩波書店、2010 [1983]

2、定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部第294回定例研究会

放送文化基金研究報告シンポジウム：ラジオ放送とレコードの関わり～戦時下の音の記録・AK盤～

日時：2023年2月18日(土) 14:00～16:30

場所：九州大学総合研究博物館 310教室

※同時刻にオンライン開催 (Zoom もしくは YouTube)

内容：

歴史的音源所蔵機関ネットワークによる AK 盤の研究 (大久保 真利子、九州大学総合研究博物館、西日本支部)

コロムビアにおける AK 盤音源とレコード化について (齊藤 徹、日本コロムビア株式会社、非会員)

時局と AK 盤—放送 100 年にむけて— (夫馬 直実、NHK スペシャル班 ディレクター、非会員)

ラジオ欄に見るレコード使用放送の変遷 (毛利 真人、音楽評論家、非会員)

(例会担当委員・司会：大久保真利子)

傍聴記

大西 秀紀

西日本支部第 294 回定例研究会は、歴史的音源所蔵機関ネットワーク主催のシンポジウム「ラジオ放送とレコードの関わり～戦時下の音の記録・AK 盤～」と共催のかたちとなった。

歴史的音源所蔵機関ネットワーク (愛称：レキレコ、以下これを使用) は 2021 年 4 月に設立された団体で、SP レコードの所蔵機関同士の連携を図り、情報交換をはじめ各機関の所蔵リストを含む国内の発売目録を統合したデータベースの作成と公開、レコード周辺資料の整理と集積、学際的な研究可能性の追求を目指すことを目的としている。現在、所蔵機関では九州大学総合研究博物館と大阪芸術大学博物館および京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターが加盟している。なお当シンポジウムは、放送文化基金の助成を得て実施された調査研究における成果報告の一環である。

九州大学総合研究博物館から三島美佐子教授の開会挨拶のあと、シンポジウム最初の報告は、レキレコから大久保真利子氏 (九州大学総合研究博物館専門研究員) の「歴史的音源所蔵基幹ネットワークによる AK 盤の研究」で。

AK 盤とは戦時下における国内・国外へのラジオ放送のために作られた SP レコードで、日本放送協会からの委託により日本コロムビアが制作した。東京放送局のコールサイン「JOAK」から取ったといわれる「AK」というプレフィックス（番号の前に付く記号）を持つレコード番号が使われたため、一般に AK 盤と呼ばれている。これらのレコードは一般発売されていないので、コロムビアのレコード総目録や販売目録などには一切情報がなく、その全貌は明らかになっていない。レキレコではまず国立国会図書館の「歴史的音源（れきおん）」に着目し、ここから無番号のものを含む 1,003 面の AK 盤のデータを抽出した。さらに日本コロムビアからデータ提供の協力も得、現在 AK 盤リストを作成中である。また AK 盤の製作時期（1940-1944）に対応する新聞紙上（朝日・読売）のラジオ欄を網羅的に調査し、AK 盤が使われたと考えられる番組の特定作業も進めている。これらの調査結果はレキレコのホームページ (<https://rekireco.com>) での公開が予定されている。

続いて日本コロムビア株式会社より齊藤徹氏（A&C 本部 スタジオ技術部 マネージャー アーカイビング担当）から「コロムビアにおける AK 盤音源とレコード化について」という表題の報告があった。日本最古のレコード企業として 110 年を超える歴史を持つ日本コロムビアの歴史とレコードメディアの変遷についての説明に加え、同社が 1939 年に開発し玉音放送の録音にも使われた円盤録音機について興味深い解説があった。

齊藤氏によれば、AK 盤に関して現在確認されているレコード番号は、AK-1（1940 年 7 月）～AK-996（1944 年 12 月）である。内容は大本営発表、戦況報告、戦線実況録音、政治家・軍人の講演・演説、音楽、詩吟、和歌、各国国歌などである。これらの金属原盤はすでに廃棄されているが、廃棄前に再生・録音されたアナログテープがあり、AK 盤では 464 音源がコロムビア社内に残されている。AK 盤の音源の一部は当時すでに『勝利の記録』（53002-53012、12 インチ盤 11 枚組）、『提督最期』（100742-100747、10 インチ盤 5 枚組）などの企画ものの SP レコードに流用され、一般のレコード番号で商品化された。これらのアルバムやその他の AK 盤の音源の一部は、戦後に『オリジナル版による大東亜戦争史（2 枚組 LP）』『音声資料による 実録大東亜戦争史（5 枚組 CD）』などの企画物商品に復刻されている。

また AK というプレフィックスを持つレコード番号は戦中期の AK 盤以外に、戦後に市販された教育レコードや歌謡曲の EP シングルレコードにも割当てられたため、戦中期の AK 盤を調査する際には注意が必要であるとのことである。最後に日本コロムビアの SP 音源アーカイブ事業の現状と今後の展望について説明があった。

続いて NHK から夫馬直実氏（NHK 大型企画開発センター ディレクター）から「時局と AK 盤 放送 100 年に向けて」と題する報告があった。夫馬氏は「歴史探偵」「NHK スペシャル 新ドキュメント 太平洋戦争」「NHK スペシャル 新幕末

史」等の番組制作を手掛けておられ、AK 盤を含む NHK のアーカイブデータを活用する立場からの発言である。

まず NHK が公開するオープンデータベース「戦争証言アーカイブス」を使って AK 盤の音源等を含む戦時下に関する史料へたどり着く方法が説明された。ここからリンクされている放送博物館の「館長だより」で開戦時の放送のタイムテーブル等を見ることが出来る。また NHK 放送文化研究所では、戦時下のレコードに関する研究論文が報告されているとのことである。

現在、川口・NHK アーカイブスには約 16,000 枚の SP レコードが保管されていて、この中には AK 盤等の戦時下の録音も含まれると考えられるが、これらとは別に、かつて NHK の旧・満州放送局に残された 2,200 枚の録音盤を紹介した「NHK スペシャル 遺された声～録音盤が語る太平洋戦争（2004 年 8 月放送）」や、AK 盤を扱った ETV 特集「戦争とラジオ（2009 年 8 月放送）」が紹介された。また最後に放送 100 年にあたる 2025 年に向けて企画されている番組について話された。いずれも戦中・戦後を生き延びた市井の人たちの思いを掬いあげようとする制作姿勢が印象的であった。

休憩をはさんで音楽評論家でレキレコのメンバーでもある毛利真人氏から、「ラジオ欄に見るレコード使用放送の変遷」と題する報告があり、1925 年に実験放送が開始された当初から、放送にはレコードが欠かせなかったことを示すさまざまな事例が紹介された。いずれも新聞のラジオ欄やラジオ年鑑等の放送関係資料から丹念に集められた情報に基づくものである。

番組制作において生放送や市販のレコードを使うだけでは当然限界が生じる。同じ内容を繰り返し放送したり、海外向け放送で各地域の時差に対応するために、放送局は次第に自前の音源を制作するようになる。この時使われたのがラッカー盤やアセテート盤あるいはアルマイトの金属板に録音するディスク式録音機で、1940 年頃より本格的に録音盤を元に編集された音源を放送に使用するようになったという。特にポータブルの録音機を使うことでスタジオ外での録音が可能になり、各種イベントの実況中継や日本各地の音風景の録音を素材とした番組作りが可能になった。ただラッカー盤やアセテート盤は音溝の強度に欠けるため、コロムビアへ委託しこれらの音源をシェラック盤にしたものが A 盤（通称茶色盤）の一部や今回取り上げた AK 盤である。

毛利氏の報告では「或る日のモーツァルト 演奏・日本軽音楽団 (AK-103)」「通りゃんせ 演奏・ニュー・オーダー・リズム・オーケストラ (AK-158)」という 2 つの AK 盤音源が紹介された。一見クラシックとわらべ唄を思わせるタイトルだが、いずれもスイング感あふれる、毛利氏のいうところの「隠れジャズ」のアレンジである。このような演奏が、当時すでに表向きはジャズの放送を控えていたという、1940-41 年のラジオで放送されていたことはたいへん興味深い。ちなみに日本軽音楽団の「或る日のモーツァルト」はラジオ欄の調査から、服部良一指揮・編曲

であることが判明したとのことである。

最後に登壇者全員による質疑応答があり、約2時間30分のシンポジウムは終了した。一般にはあまり知られていないAK盤を取り上げた今回のシンポジウムは、非常に充実した内容だったが、全体的に時間不足の感は否めなかった。レキレコのAK盤に関する調査はまだ始まったばかりで、250枚ほどあるリストの空白部分の調査や放送日の特定など、多くの課題が残っている。今後の継続的な調査が重要なのは言うまでもない。

東洋音楽学会西日本支部第295回定例研究会

柴田南雄のシアター・ピース考

日時：2023年3月4日（土）開始：13:00／（開場）12:30

場所：京都市立芸術大学大学会館ホール（京都市西京区大枝沓掛町13-26）

内容：

- 1、イントロダクション「柴田南雄の創作活動とシアター・ピース」竹内直（京都市立芸術大学、西日本支部）
- 2、講演「柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題——記譜されていない情報に着目して」徳永崇（広島大学大学院、非会員）
- 3、座談会 司会：滝奈々子（京都市立芸術大学、西日本支部）

（例会担当委員：竹内直）

講演要旨：柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題——記譜されていない情報に着目して——

徳永崇（広島大学大学院人間社会科学研究科）

柴田南雄（1916-1996）のシアター・ピースは、歌手の移動や所作を伴う合唱作品である。日本の民謡や民俗芸能を主な素材としており、これらが指揮者の即興的な判断によって並置され、かつ歌手の位置が様々に移動するため、独特なカオスが形成される点も大きな特徴である。このため、歌手は歌唱のみならず自らの動線や身振りなど、多くの事象を考慮する必要があるし、内容によっては、舞台照明や衣装などに工夫が求められる場合もある。一方、楽譜には上演に関する詳細な指示は記されておらず、歌手が自発的に考え、具体化するよう仕掛けられている。一見すると、自由で開かれた時空間の創出につながる側面もあるが、表現するための高度な知識と鍛錬、そして準備が必要であり、歌手がこれら「記譜されていない情報」をどのように読み解くかが上演の鍵となる。本発表では、2つの合唱団に上演を依頼し、その過程を調査した結果について報告した。

調査の対象は、《念仏踊》（合唱団ある第33回定期演奏会、2019年6月、広島）、《歌垣》（室内合唱団“零”6thコンサート、2020年1月、広島）、および《追分節考》

(合唱団ある第34回定期演奏会、2021年7月、広島)の3演目である。まず《念佛踊》については、セレモニー的な雰囲気醸成及び、それに伴う衣装や照明の演出などに工夫が見られた。続いて《歌垣》については、教会という会場の形状を活かした舞台配置を行うと同時に、歌手の自発的な移動に関する配慮が見られた。3件目の《追分節考》は、コロナ禍におけるシアター・ピース上演の事例であるが、客席内での移動は避け、バルコニー席を活用するなど制限された中での試みが見られた。

なお、上記のアイデアは、程度の差はあるが、①過去の事例(音源・著述など)、②実演経験者からの情報提供、③有力な初演者、などから影響を受けていることが分かった。このことから、柴田のシアター・ピースの上演に際しては、口頭伝承に類する形での情報伝達が有力である様子が窺える。筆者はこの点に着目し、人々が交流し長い時間をかけて共に思考するという「装置」としての側面を持つことを指摘した上で、このような非効率的な作業が、人との接触を避け、偏った効率主義に傾く現代の世相と相反することから、柴田のシアター・ピースの再演において多くの困難が生じる可能性について言及した。

傍聴記

上野 正章

京都市立芸術大学芸術資源研究センター「音と身体の記譜研究」プロジェクト企画主催、東洋音楽学会西日本支部共催で、シアター・ピースにおける柴田南雄の記譜を考えるシンポジウム「柴田南雄のシアター・ピース考」が開催された。

最初のプログラムは、柴田の生涯と作品の紹介及びシアター・ピース概説である。やや足早ではあったが、講演に先立って背景知識の整理や紹介を行う配慮を嬉しく思った。次いで、講演「柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題 記譜されていない情報に着目して」が行われた。『追分節考』を例にして記譜法が簡潔に解説され、『念佛踊』、『歌垣』、『追分節考』を事例に、上演映像を交えながらリアリゼーションの実際が詳述された。描き出されたのは、優れて独創的であるがゆえに安易な上演を拒む一方で、真摯に挑むならばリアリゼーションの創意工夫を通じて人々の交流を促し、思考を刺激し、豊饒な音楽に立ち会うことを可能にする「装置」としてのシアター・ピースである。シンポジウムの締め括りは講師を囲む座談会が行われた。まずシアター・ピースにおける作曲家の管理と演奏家の自由の問題が問われ、作品における頂点(山場)の創出を事例にして、後期作品ほど記譜を通じた作曲家による作品制御が強まることが示された。今年『追分節考』の初演(田中信昭指揮、東京混声合唱団)から数えてちょうど50年になる。伝承の現状も問われ、柴田は自分の作品の伝承に関しては特に意見を記していない一方、生前から主導的に柴田の作品の上演に取り組んできた人々の言葉が新たな上演の取り組みに際して重みをなしつつあるという状況が報告された。専門的な音楽家が初演に重要

な役割を果たした一方で、楽譜は公刊されて広く合唱の愛好家に供されていることも補足された。また、シアター・ピースを儀礼における装置性の観点から検討することを通じて、同時代の儀礼研究が柴田の創作活動に影響を与えた可能性がフロアから指摘された。

周到な講演と示唆に富む議論で実り多いシンポジウムとなった。振り返り、柴田がジョン・ケージの不確定性の音楽をどのようにして換骨奪胎したかという観点から、洋楽受容の文脈でシアター・ピースを論じることができるかもしれないと感じた。また、記譜に焦点が当てられたがゆえに議論はリアリゼーションを巡ったが、全ての聴き手が上演過程を共にするとは限らない。シアター・ピースの聴き方に関しても面白い議論ができるのではないだろうか。

3、定例研究会案内（第296回）

日本音楽学会西日本支部・東洋音楽学会合同例会

日時：2023年7月15日（土）開始：14:00／入室開始時間 13:50

会場：オンライン（zoom）

<https://keio-univ.zoom.us/j/81561676248?pwd=ZDJNdnMxL1JFdER6b2QvNjQwbzF5Zz09>

ミーティング ID: 815 6167 6248 パスコード: 966175

司会：池上 健一郎、藤田 隆則（京都市立芸術大学）

企画・例会担当：藤田 隆則

○修士論文発表（司会：藤田 隆則）

（1） 荒野 愛子（神戸女子大学博士後期課程）（日本音楽学会）

「能の謡における作曲とは何か―「野宮」をめぐる―」

（2） 盛口 和子（大阪大学人間科学研究科）（東洋音楽学会）

「学校音楽科において「創造性」はどのように捉えられてきたか―「国民音楽」創造を目指す井上武士の音楽教育論を中心に―」

○研究発表（司会：池上 健一郎）

（3） 中原 佑介（人文学研究センター音楽学研究所 バルトーク・アーカイヴ）（日本音楽学会）

「バルトーク・ベーラの1926年のピアノ作品群における自筆資料の歴史的状態の再構築」

お知らせ

◇研究発表の募集

西日本支部の定例研究会で研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表、修士論文・博士論文発表、報告等）、発表題目、要旨（800-1000字程度）、氏名、所属支部、所属機関、連絡先（E-mail等）を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

修論・博論の発表は、修了認定大学の所在する支部が受け付けます。修了認定大学に勤務される会員は、修論・博論発表の候補に関する情報を当該支部へお寄せくださいますようお願いいたします。

◇オンラインによる例会開催について

好評の声が多いため、当面はオンライン開催を優先し継続する予定です。反面、オンラインで参加いただいていない会員のご意見ご要望を、おうかがいしたいと思います。忌憚のないご意見をお寄せください。

◇メールアドレスを変更されたとき

東京の本部事務所（LEN03210@nifty.ne.jp）まで、必ずお知らせください。今後、学会全体としてwebを利用した会員専用サービスを充実させる計画があり、その際には電子メールの登録が必須になります。ご協力をお願いいたします。

（編集担当：藤田 隆則、吉岡 倫裕、細野 桜子）

編集・発行：(一社) 東洋音楽学会 西日本支部

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田隆則研究室気付

東洋音楽学会 西日本支部事務局

TEL 075-334-2392 E-mail tfujita@kcua.ac.jp

<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>